

# 小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童のかかわりを促すための意見集約型課題の活用

○石田脩介\* 大庭重治\*\* 池田吉史\*\*

(\*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科) (\*\*上越教育大学大学院学校教育研究科)

KEY WORDS: 小集団学習場面, 特別な教育的ニーズのある児童, 意見集約型課題

## I. 問題と目的

特別な教育的ニーズのある児童が主体的に学習を進めるためには、支援者や他児との良好なコミュニケーションの獲得が期待される。その場として、小集団学習場面が活用されている。小集団学習場面の最大の利点は、特別な教育的ニーズのある児童と周囲の他者を結びつける仲介者を配置できる点にあり、児童は仲介者の円滑なコミュニケーションを観察することができる。こうした小集団学習場面における支援課題として、情報統合型課題が取り上げられてきた(大庭ら, 2012; 石田ら, 2015; 2016)。情報統合型課題とは、集団の成員が各自所有する情報を持ち寄って解決を目指すタイプの課題である(仮屋園ら, 2000)。この課題では、全員が議論に参加し、情報を出し合っはじめて課題が達成される。しかし、情報統合型課題を用いることで、児童たちの係わりに変化は見られるものの、情報を提供するだけの係わりが多いという課題も指摘されている(仮屋園, 2003)。また、活動における方略が洗練されることにより、かかわり自体が少なくなる傾向も指摘されている。そこで、情報統合型課題と特性の異なる意見集約型課題に着目した。意見集約型課題とは、正答のない課題について議論をし、集団としての意見を決めるという課題である(仮屋園ら, 2000)。意見集約型課題は情報統合型課題に比べて意見が多様に提出されるという利点があるが、参加しない成員がいても議論が進展し、達成目標が不明瞭であるという側面もある。

そこで、本研究では、小集団学習場面における意見集約型課題の遂行過程にみられる児童間のかかわりの変化を検討することで、特別な教育的ニーズのある児童の他者とのかかわりの変化を促すための課題内容と、意見集約型課題の活用方法を検討した。

## II. 方法

### 1 対象児

読み書き・算数・コミュニケーションに対する特別な教育的ニーズの訴えがあった2~6年生の児童16名(男子8名, 女子8名)。

### 2 課題

主指導者と補助指導者4名が関与する小集団学習場面を設定した。意見集約型課題をベースに作成したすごろく課題(すごろくえすと)を実施した。課題内容は、主人公(コマ)の能力(体力, 攻撃力, 素早さ, 優しさ, 回復力)を班で相談して決め(数値を割り振る), モンスターなどが配置されたすごろくに挑戦するというものであった。

X年5月から9月にかけて10回(約40分)実施した。第1回から第3回までは、意見集約型課題であり、第4回からは情報カードの導入により、情報統合型課題の要素を盛り込んだ。また、第8回からは、決まった金額まで能力などが有利になるアイテムを購入できる買い物の場面を導入した。「すごろくえすと」における主な変更内容を表1に示す。

### 3 倫理的配慮

対象児の保護者及び在籍学校からの研究協力の承諾と上越教育大学大学院の研究倫理審査委員会の承認を受けた。

表1 「すごろくえすと」における主な変更内容

回	課題の変更内容
1	すごろくのマップを見ながら、班で能力の割り振りを行う。マップはスタートとゴールを含め、20マスとした。
3	宝箱に入れる宝を決める場面を設定した。宝は下級生が中心になって決めるというルールを設定した。
4	情報カードを導入した。情報カードに能力の振り分け記入、宝の中身を決定、班での能力の割り振りの決定という順序に設定した。
5	情報カードの分担をあらかじめ決定しておくように変更した。
6	情報カードに能力の割り振りを記入する場面での相談を禁止した。
7	マップを28マスに変更した。
8	宝箱の中身を決める場面を削除し、 <u>買い物をする場面を導入した</u> 。お金は2年生で\$100札(3枚), 3年生に\$50札(4枚)を割り振った。買い物は、班で相談して決定した。

## III. 結果と考察

第1回から、非常に意欲的に活動に取り組んでいる様子が見え始めた。しかし、継続していくうちに、上級生や、発言力の強い児童が他の児童を説得し、周りはそれを聞いていただけになりがちであった。これは、参加しない成員がいても議論が進展するという意見集約型課題の特徴によるものであると考えられた。

そこで、それを解決するために、第4回からは、情報カードを導入した。情報カードを導入したことによって、他児の意見を聞かなければ、マップにどのようなマスが配置されているかわからないため、他児の意見に耳を傾ける必要性が生じた。これによって、下級生の発言数の増加が見られるとともに、聞き手も耳を傾けている様子が見られた。また、宝箱の中身の決定や買い物の場面において、下級生が中心となって活動できるルールを導入したことにより、その場面において下級生が積極的に意見を出すようになった。ただし、宝箱の中身を決定する場面において、下級生の意見が尊重されたが、意見が分かれず議論に発展しない場面もあった。そこで、第8回目から買い物場面を導入したところ、下級生が主体的に関与し、値段と効果のバランスに注目した多様な意見が出されるようになった。

活動を継続していくことで、これまで他者の意見に耳を傾けず、自分の考えを通そうとしていた上級生は、他者の意見についての感想を募ったり、それぞれの意見の良い点と課題点を挙げたうえで、どのようにするかを班で相談したりすることができるようになった。

以上のことから、特別な教育的ニーズのある児童の他者とのかかわりの変化を促すためには、意見集約型課題のような開かれた解答に向けての議論の場面を設定しつつ、情報統合型課題のように、各成員の役割を明確にして、全員が関与し、かつ多様な意見が出やすい活動構造を工夫することが必要であると考えられた。

(ISHIDA Yusuke, OHBA Shigeji, IKEDA Yoshifumi)